



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3440 号 2017.1.4 発行

自分は健常者だと思っている私たち全員が抱える「ある重い障害」相模原障害者殺人事件から考える  
現代ビジネス 2017年1月4日

光岡 英稔, 福森 伸

2016年7月、相模原の障害者施設が襲われ、入所者19人が殺害された。

容疑者は犯行予告の手紙の冒頭に殺害理由として「世界経済の活性化」を挙げた。続けて「重複障害者の方が家庭内での生活、及び社会的活動が極めて困難な場合、保護者の同意を得て安楽死できる世界」を望むとしたうえで、「障害者は不幸を作ることしかできない」と結んだ。

容疑者のしたことは断固として拒絶する。だが、彼の考えを突き詰めていったとき、私たちが日々の暮らしで馴染んでいる経済性や効率といった価値観を極端な形であれ、体現しているにすぎないのではないかと。そう思えてくる。

踏み込んで言えば、彼はある意味で、現状の世のあり方によく適応し、「健常に」育ったのかもしれない。培った健常さが障害者の抹殺に行き着いたとすれば、その凶暴性は人間の本能に根をもっているはずだ。

本能のままの振る舞いと凶暴性に境界はあるのか。人間にとってのノーマルさ、障害とは何か。

こういったことを専門家はどのように考えているのか。そこで武術界で注目されている光岡英稔氏と福祉業界で独自の活動を展開している福森伸氏に対談をお願いした。

光岡氏については過日、「現代ビジネス」に掲載されたインタビュー「教育すると、人間は『弱く』なる!」を読んでいただきたい (<http://gendai.ismedia.jp/articles/-/45934>)。

しょうぶ学園について説明すると、鹿児島にある知的障害者支援施設であり、ドキュメンタリー映画「幸福は日々の中に。」が全国で公開されるなど、メディアの注目は近年高まっている。



その発想のユニークさは、たとえば俳優の広末涼子が出演したCM曲にも使われた、園の利用者の障害者と職員からなるパーカッショングループ「otto&orabu」の演奏にも現れている。メンバーのうち施設利用者は音階がわからず、専門的な訓練も受けていない。

otto&orabu [写真提供] しょうぶ学園

だが、いついかなる時も

ブレることなく、目前の楽器に向かい、行為することに没頭する。そんな彼らだからこそ坂田明をはじめ名だたるミュージシャンとセッションしようとも物怖じせず、いつも通り大胆に演奏する。

その姿を見るとき、多数派の健常者は向上、発展することを疑いもしない自らをいぶかしく感じるだろう。

しょうぶ学園の試みは、私たちが現実と信じている以外の現実のあり方を示唆している。ふたりの対談は、現実と幻想の境界線を走るように進んだ。(企画・構成／尹雄大)

**普通って何だろう？**

**光岡** 鹿児島に足を運び、しょうぶ学園を見学したとき、改めて「普通って何だろう」と考えさせられました。

私は武術をやっていますから、その観点から話します。

**光岡英稔 (みつおか ひでとし) 1972 年岡山県生まれ。日本韓氏意拳学会代表。**

武術を稽古して行くと「自由自在に動くこと」と「自然に動くこと」の絶対矛盾に行き着きます。相手は自分を殺そうとする。だから相手を阻止します。そのためこちらも自在に動きたい、相手を自由に操りたい。ようは私の思い通りにしたいわけです。

自由に振る舞うことは、必ずしも自然な行いではなく、「相手をコントロールしたい」といった作為の要素が入ります。そうでありながら武術の境地においては「何もしない」という無為自然であることをよしとします。

つまり作為的な稽古の果てに無為に向かいます。

ところがです。

しょうぶ学園の利用者の皆さんは何の練習もせずに、ただ「普通」に作為なく振る舞っていました。「これはかなわないなあ」と感じました。果たして無為を求めて練習することに意味はあるのかと深く考えさせられました。



**福森** 武術は相手から身を守り、守り切れなければ攻撃に転じる。自分のエリアが侵されない限りは攻撃しない。そういう考えがベースにありますよね。

**福森伸 (ふくもり・しん) 1959 年鹿児島県生まれ。しょうぶ学園施設長。**

それで言えば、私には彼らがとても無防備だと感じるんです。そういう相手にはどう対応しますか？

**光岡** ちょっと唐突かもしれませんが、ある種の「部族」として接する必要があると思います。たとえば、アマゾンに住むピダハンやイゾラドと呼ばれる少数部族は、自分たちで食べ物をとって日々暮らしています。その暮らしが侵されなければ問題ない。

**福森** 防備する必要もありません。

**光岡** けれどもテリトリーを侵されたら争いが起きます。フィリピンのカリంగా族、イフガオ族だと首を刎るところまで徹底してやったりします。

ただ、わざわざテリトリーを越えてむやみに襲いはしない。境界線ギリギリでの争いや、狩りの最中にたまたま遭遇した他の部族との争いなどはあるようです。

しょうぶ学園の利用者の互いの距離のとり方を見ると、そうした部族の振る舞いを思い起こしました。

**福森** 利用者を部族に喩えるならば、僕らは平気で彼らのテリトリーに介入します。知的に障害があるからなのか、それに対してほとんどの場合、抵抗しません。

彼らの動きはプリミティブで非常に人間らしい。特に障害の重い人は最低限の動き以上



の「発達」はしない。そういう無防備な人たちに対し、教育や支援という語を使って福祉は介入し、彼らの世界を変えようとする。「時間を守るようになった」とか「ご飯を残さず食べられるようになった」といったことを評価するのです。

でも、それは彼らのしきたりを変えているんじゃないか。ノーマルという言葉を使って、彼らを僕らの国の法律に従わせているだけのことではないか。それを「ノーマライゼーション」「共生社会」と言うけれど、彼ら部族のしきたりはどこへ行ったんだろうと思うのです。

**光岡** 無防備ではあっても争いが起きる例もありますか？

**福森** はい。誰も圧力がかかれば防衛の反応が起き、それでも防げなかったら攻撃します。それで言えば、自閉症スペクトラムの人は圧力の感じ方が独特です。

たとえばデパートの試食コーナーで、蓋の開いている惣菜があると全部閉めて回ります。「蓋を開けっ放してはいけない」と習っているからそうしてしまう。

でも、そういうことをしたら怒られますよね。どうすればいいかわからなくなることが恐怖なのです。戸惑っているとさらに圧力がかかるから攻撃的になる。それは粗暴行為と言われます。圧力の感じ方が特殊ゆえに僕らに理解しにくい。でも、なぜそうするのかかわかれば対処できます。

施設内で急に大声出したりする人もいます。以前はそれを止めていたけれど、最近は「ここはちょっとまずいのでこちらでお願いします」くらいになってきました。

**彼らのしきたりに従えばいい**

**福森** 彼らのしきたりに従ったらいいんじゃないかと思うんです。彼らは僕らのところに侵入して暮らしを壊そうとしないのだから、僕らも侵入しないほうがいい。

でも、アマゾンにいるわけではないから、多数派である僕らのシステムを知らないとうまく生きていけない。だからこそ彼らの考えを尊重したシステムを社会に加えればいいのですが…。

マズローの自己実現の欲求論があります。食欲、性欲を満たして自己実現に至るというものです。それを言うなら、彼らの自己実現の達成を手伝うのが福祉のはずです。この場で服を脱ぎたい人、大きな声を出したい人がいたら、それが実現できるアフオーダンスの環境を作ればいい。

他害や自傷行為を容認するのは難しいけれど、他害や自傷があるから問題ではなく、それらが起きるようになった環境が問題なのです。

彼らのほとんどのしきたりは、僕らがオクケーさえすれば問題ない。それが実現できるのが福祉施設のはず。施設の外の社会に出ると健常者の掟が強いから、彼らのしきたりはまるで通用しない。

**光岡** こちらのしきたりを教えることによって彼らの身体性や文化を否定し変えようとするわけですね。



何かを教え伝える身でありながらも、私は教えること自体がおこがましい行為だと思っています。教師、指導者の目的がその人の個性を変えようとする教えるを中心とするなら、その教育は必ず失敗します。人の個性や身心を育むことが前提に何かを教えるならまだマシですが。

**福森** 人の本質は変わりません。変わらないものを変えようとして教えるとギクシャクします。圧力をかけることになりはしても、それぞれの人が自分の本質に気付けないままになってしまう。

いままになってしまう。

**光岡** しょうぶ学園では、人の本質をめぐってのせめぎ合いが見えます。

しょうぶ学園の園庭

**自然と自由と楽は共存できない**

**福森** 障害があつて屈折したり、愛情かけられず養護施設でずっと暮らしてきたある人が、18歳でしょうぶ学園に来ました。どうやったら穏やかになっていくだろうかと考えるわけです。

簡単なケーススタディ、つまり支援方針と考察だけではダメなことはわかります。その人が生きてきた18年間かけてやるくらいのパッションがないと愛情の回復はできないのです。

**光岡** その場合は、相手のテリトリーに入らないとできませんよね。

**福森** 懸命に入ろうと思つても「早く帰れ」とか「バカ」と言われます。

こちらのアプローチを圧力だと感じるから、「俺の世界に入ってくるな」というわけです。不適応行動や問題行動と言われます。通常だと「それらを直すにはどうしたらいいか」と考えます。

そうではなくて、この場合は問題行動自体が正しい行動なんです。こちらが圧力をかけているんだから彼が抵抗するのは当たり前です。

その構図がわかると相手に対して優しくなれます。「そうやって当然だよな」と。でも、「すまないけれど、また行かせてもらおうぜ」と思つてます。そういう根性があるわけです。

**光岡** 圧力のない状態が必ずしも自由とは言えません。夏にクーラーがあると楽に過ごせます。楽だから自然かという、そうではない。しかし、楽を求めるところに人間としての自由はあります。木を切って土を掘り返し建物を建て、クーラーをつけて快適に過ごす。それが自由や楽の象徴であり文明の証でもあります。

私たちはコンクリートの建物よりも野山や小川を見ることに自然を感じます。そちらの方が自然なことは皆わかっています。けれども自然の中で自然のルールと共に過ごすことは人にとって不便さや不自由を意味します。

自由を求めると「山があれば削って、川を掘って快適な環境にすればいい」という振る舞いにしかなりません。そういう発想のもとで最終的には原発までつくりました。

人には自我や本能と、それらが求めるものを実現できる知能やテクノロジーがあります。それゆえ戦争も人間にとっての自然と自由なのかもしれません。でも、本来なら知能を用いて戦争しないで済むための手立てを考えないといけない。そのために知能があるわけですから。

**本当に自由であるとは？**

**福森** 若い頃は人を殺すことは許せない。戦争は絶対に許せないと思ひ、そういう考えをする人自体を否定していました。

今はこう思うようになってきました。生まれてきて、いまここに生きている人間がしている以上、全てが“アリ”かもしれない。戦争を肯定しているのではありません。戦争はNOだし、“ナシ”ですよ。

「君は戦争したいかもしれないけれど、僕は全然したくない」という考えには変わりない。けれども「君も生まれて来てしまったんだね。僕もそうだし、お互いしょうがない」というふうになれば、たとえその人の考えには理解は示せなくても、その人が存在することはアリだと受容できます。

**光岡** 相模原の事件に対しても容疑者の存在はアリと考えますか？

**福森** やったことは絶対にナシです。でも、彼という存在がいた事実をいくら否定しようとも消すことはできない。その人の存在はアリなのです。

**光岡** 無論、彼の行為はナシです。むしろ問題は、彼のような存在をアリだと言えないような個々の自信のなさが人の内面にある気がします。

先ほど、私は本能があるから「戦争も人間にとっての自然と自由なのかもしれません」とした上で「戦争しないで済むための手立てを考えないといけない」と言いました。

なぜかといえば、私が最もされたくないことを相手にする。ここに良知や良心は抵抗を



感じるからです。自分の中にある良知や良心が相手を通じて「それはおかしい」と私に教えてくれるからです。

他者から自分を省みられる。そこに人という種の意味があります。ここでいう「他者性」は社会の価値観や常識といった、私たちがつい気にかけてしまう「他人の目」のことではありません。

翻って、しょうぶ学園の利用者のみんなには他者性があります。でも客観性はないようです。私の存在はわかっても、私が「どう思うか」といった客観的な視点は持っていないように思います。

**福森** 親が亡くなって葬式から帰ってきた人がいて、僕らは心配して「大変だったね。どういことがあった？」と聞きました。すると「ご飯をいっぱい食べてきた」と言う。僕らにとっては涙を誘う言葉だけど、彼にとってはリアルだし、葬式だからどうこうという考えに囚われていない。自由なんです。



その人はご飯を食べられてよかったというんだから、「よかったね」と言えばいいのに、僕らは「なんてことだ」と涙が出る。「それは悲しいことなんだよ」と教えようとしたりするわけです。

**光岡** それではその人を尊重していないことになりますね。

**福森** パソコンを使えない。字が読めない。お金の計算もできない。意思表示ができないから熱が39度あってもそれを言えない。世の中生きていく上では不自由なはずなのに、彼らはどうしてあんなハッピーな顔をしているのか。

僕らは便利だし色んなことをすぐに調べられ、情報は手に入れられる。なのになぜか自信が持てないし、全然自由ではない。

僕らは自由になればなろうとするほど、自由のもたらす障害を抱えるようになっていきます。約束してもすぐに連絡できるから遅刻しても構わないと思っている。絶対に遅れないようにしようとする方が大事なのではないですか。

自分の欲求を満たすことにかまけ、ますます不自由になる僕らが彼らのしきたりや無視すれば、それが圧力をかけることになって彼らの自由をなくしてしまうことにしかならない。

**光岡** 彼らを見ていると、やはり武術の究極とも言える自由と自然の絶対矛盾が、矛盾なく成立しているように思えます。彼らから学ぶことが多々あるように感じたのと同時に、人間という種に対して少しだけ希望が持てる気がして来ました。

**私たちは定型発達という障害を抱えている**

**福森** アメリカの自閉症協会のニューロティピカル（定型発達）に関する定義がとてもおもしろいのです。要は多数派を占める私たち健常者のことです。ちょっと資料を読みますね。

- ・ニューロティピカルは全面的な発達をし、おそらく出生した頃から存在する。
- ・非常に奇妙な方法で世界を見ます。時として自分の都合によって真実をゆがめて嘘をつきます。
- ・社会的地位と認知のために生涯争ったり、自分の欲のために他者を畏にかけたりします。
- ・テレビやコマーシャルなどを称賛し、流行を模倣します。
- ・特徴的なコミュニケーションスタイルを持ち、はっきり伝え合うより暗黙の了解でモノを言う傾向がある。しかし、それはしばしば伝達不良に終わります。
- ・ニューロティピカル症候群は社会的懸念へののめり込み、妄想や強迫観念に特徴付けられる、神経性生物学上の障害です。

・自閉症スペクトラムを持つ人と比較して、非常に高い発生率を持ち、悲劇的にも1万人に対して9624人とされます。

**光岡** 実におもしろい。

**福森** 協会では、自閉症スペクトラムをニューロティピカルの対義語に当たる「エイティピカル」と呼んでいます。非定型発達を意味します。

エイティピカルは社会的コミュニケーションの障害があるといわれていて、どういう特徴があるかというところ、

- ・自分が必要な時だけコミュニケーションをする。
- ・反復的で一方的、形式的で回りくどい。さらに些細なことでも柔軟に交渉できずこだわる。
- ・率直に本当のことを言いすぎる。嫌いな人に「お前は嫌いだ」という。
- ・自分だけが長々と話し続ける。断りなしに話題を変える。
- ・相手を不愉快にさせる言葉遣いをする（自分ではそう思っていない）。
- ・視線や表情、対人距離などの問題がある。近すぎたり離れたり。
- ・相手の言葉の意味を推論できない。言われた通りに解釈する。
- ・冗談や比喩、反対語の理解が困難。

**光岡** 「エイティピカル族」を包括して“アリ”にすれば世の中は今よりもノーマルになるかもしれませんよ。

**福森** エイティピカル族は「お茶でもどうですか」と勧めて、相手に「結構です」と言われたら本当に出さない。僕らは「結構です」と言われても「まあまあ」といつて出すわけです。

僕らは誰かが時計を見たら「そろそろ帰りましょうか」とか直接的ではないニュアンスの中でコミュニケーションをとる。それを侘び寂びと言ったら文化になるでしょうけれど。とどのつまりは何が正しいかわからない。両方あっていいはず。

**光岡** 個人の中を見ると、ニューロティピカルとエイティピカルのどちらもありますよね。

**福森** そうです。しかしながら福祉業界はニューロティピカルに寄せたことを自立と呼んでいます。でも、よほど彼らの方が自立しているのです。人の賞賛を求めて自分のやることを変えたりしない。そもそも賞賛の意味がわからない。

僕らは人の賛同を求め、ブレまくっている。しかし、彼らはブレない。態度を変えない。彼らはすでに自立しているのなら、「自立支援」はいったい誰のためなのでしょう。

**光岡** 福森さんは境界のギリギリのところにいるのが好きそうですね。

**福森** そこから見える風景が好きなんです。色即是空という語がありますよね。これを独自に解釈しています。色は僕らの世界です。空は見ることはできないけれど、たぶん存在している世界。宇宙に広がるような、永遠に非定型で見えない。でも、あると信じています。色は現実主義と言われる世界で、その最先端にいるのは安倍総理かもしれない。

おそらく想像もつかない展開、ミラクルは色と空のせめぎ合いのところにあるんだろうと思います。武術の狙っているところは、その辺ではないですか？

**光岡** そうだと思います。死生や勝負のギリギリの境界線がどこにあるのかを知りたい。それが武術家の本性です。それも安全パイでない方からその境界線を求めたい。

本当に武術が好き人は境目のギリギリを楽しむのが好きですね。だからこそいまだかつてない何かが生じます。

**福森** 僕はそこをエッジと呼んでいます。そこには病気や健常を問わず、「思うようにいかない」と思う人たちがいる。そういう人は「現実的に生きないといけない」と言われているから、無理をしてしまう。



そうではなくて、右も左も見えない真ん中あたりまで戻ってもいいんじゃないか。現実と夢、秩序と非常識の真ん中に時々いると、妄想を話す人にすごく興味が湧いてきます。

「僕はフェンダーのギターを持っているけれど、明日リンゴを食べるんだ」なんて言われる。なんでそういうことを考えるのか。必死についていこうとする。気づいたらエッジに立っている。そこで人間に関するミラクルが見られるんじゃないかと思っています。(了)

### 養子縁組 10～17歳の9割「養親の愛情を感じている」 毎日新聞 2017年1月4日 7割は自己肯定感高く 専門家、家庭で育つことの重要性指摘

生みの親でなく養子縁組した親と暮らす10～17歳の7割は自己肯定感が高く、9割は親の愛情を感じているとの意識調査結果を、日本財団がまとめた。国が全国の中学3年に実施した調査結果よりそれぞれ割合は高く、専門家は児童養護施設でなく家庭で育つことの重要性を指摘する。

民間の2団体のあっせんで養子縁組した263世帯に8～9月に調査し、10歳以上の子を対象とした質問には89人が答えた。2団体は養親に対し、子に養子縁組であることの告知を促している。

子どもに「自分自身に満足しているか」を聞いたところ、26%が「そう思う」と回答。「どちらかといえばそう思う」を加えると71%になった。「親から愛されていると思うか」の質問では「そう思う」が64%で「どちらかといえば」を足すと93%に達した。

内閣府の中3を対象にした2011年調査では、同じ質問に対する「そう思う」の割合はそれぞれ16%と46%。直接比較はできないが、養子縁組家庭の子の方が高かった。

一方、友人関係がうまくいっていると答えたのは66%で、小4～中3に同じ質問をした内閣府の14年調査の81%より低かった。

日本財団福祉特別事業チームの高橋民紗(みさ)さんは「こうした意識調査は珍しい。絵本の読み聞かせなど子どもと積極的に関わっている養親が多く、それが子の自己肯定感につながったのではないか。友人関係については養子であることを周囲にどこまで話せるかが影響した可能性があり、社会の理解は十分とはいえない」と分析する。【黒田阿紗子】

### 社説：格差社会／「二極化」が健康まで脅かす 神戸新聞 2017年1月4日

「格差」が拡大している。最も端的なのは貧富の差だ。

日銀などをつくる金融広報中央委員会が実施した昨年の「家計の金融行動に関する世論調査」では、預貯金など金融資産の平均額が1千万円を超える一方、資産がないか、残高がゼロの世帯が3割を占めた。

生活保護の受給世帯は160万世帯を超え、依然、過去最高水準にある。子どもの16%、ひとり親世帯の5割以上が「貧困」とされる。

そこから見て取れるのは、「持てる者」と「持たざる者」の二極化が進む日本社会の姿である。懸念されるのは、こうした傾向が定着し、格差が開きつつあることだ。

憲法25条は全ての国民に「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」を保障し、国に努力義務を課す。格差拡大でその保障がおろそかになっていないか。

神戸常盤大学(神戸市長田区)の足立了平教授は、神戸の市立病院で勤務した経験のある歯科医だ。歯科衛生士の卵を教える傍ら、女子高で歯科健診を受け持ち、生徒の歯を定期的にチェックする。

その足立教授が、この5年ほど気になっていることがあるという。高校生の歯の健康状態が大きく二分されてきたように思えるのだ。

歯科医が抱く危惧

今の時代、高校生に限らず「美しい歯」への関心は高い。幼児からの歯磨き指導もあり、最近の女子生徒の大半はきれいな歯をしている。

その中に、5本から10本も虫歯のある子がいる。人数は100人に5人程度だが、心配なのは健康な歯の生徒とそうでない子の差が大きいことだ。中間の状態の生徒がほとんどいないことも引かかる。

歯の健診だけでは個々の生徒の生活状況は把握できない。ただ、習慣や環境の違いは歯をはじめとする口の健康に影響を及ぼす。歯や口の症状が身体の疾患につながることもあり、注意する必要がある。

足立教授がそのことを痛感したのが、22年前の阪神・淡路大震災で初めて認定された「震災関連死」である。亡くなった921人のほとんどが高齢者で、肺炎が24%を占め、死因の1位だった。

高齢者の肺炎の8割は、食べ物やだ液が誤って気管内に入る「誤嚥（ごえん）性肺炎」だ。震災関連死にもかなり含まれていたとされる。

避難所は水不足の状態だった。歯磨きやうがいができる場所も限られていた。口の中の細菌が爆発的に繁殖する。免疫力が低下して誤嚥が死につながった可能性がある。

災害時は、避難所などの過酷な環境に長く置かれる人と自力で生活再建できる人に分かれる。時間がたつほどその差は大きくなる。

それと似たような現象が、平時にも生活環境の二極化として現れているのではないか。足立教授はそんな危惧を抱く。要因として疑うのが、経済的な格差が及ぼす影響である。安全網のほころび

経済的に余裕のない家庭の子どもは歯科を受診しなくなるという指摘もある。歯科だけではない。大人も含め、生活苦を理由に医療全般から遠ざかる人が増える傾向にある。

民間シンクタンク「日本医療政策機構」が2008年に行った調査では、低所得層の4割が「この1年で具合が悪くても医療機関に行かなかった経験がある」と答えている。

全日本民主医療機関連合会によると、経済的理由で受診が遅れたことによる死亡例は、15年の調査で全国で63件確認されている。大半は1人暮らしだが、深刻なのは家族がいても全員が「貧困状態」とされたケースが3割もあることだ。

「悲しい死」は県内でも報告されている。神戸市内で亡くなった60代の男性は体調を崩して入退院を繰り返したが、保険料滞納で無保険状態となり、1年ほど治療を中断した。1人暮らしの年金生活。知人の勧めで病院に足を運んだ時は肝臓がんが手遅れの状態だった。

肝心なときに社会のセーフティーネット（安全網）が機能しない。それどころか、ますますほころびが大きくなっているように思える。

もともと日本の社会保障や税制は保険料などの負担が低所得者ほど重くなると、大沢真理東大教授は指摘する。経済的な面も含む公的な生活支援策が格差を十分に補えていないためである。困窮者を支える制度が「持たざる者」を圧迫しているとしたら、本末転倒というしかない。

世界保健機関（WHO）が全世界的な「健康格差」の拡大に警鐘を鳴らしたのは9年前だった。日本は格差を解消するのではなく、むしろ拡大する方向に進んでいる。

「何とかしてほしい」と悲鳴が上がる。憲法25条は健康的な生活を営む権利があるとし、その実現を国に求めている。その重みを改めて認識しなければならない。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

